

第二回 董賊を謀りて孟徳刀を献ず

— 曹操の登場 —

○前回から今回まで

ここで舞台は後漢の朝廷に変わります。黄巾の乱が平定された中平六年（一八九）、霊帝が死去すると、息子の幼い少帝が即位します。少帝の生母・何皇后の兄の何進（外戚）が大將軍となつて実権を掌握し、宦官勢力の一掃をもくろみます。

何進は政府内の袁紹・曹操らと協力する一方、獍猛な西方の軍閥董卓に協力を要請します。これに応じて董卓は精銳部隊を率い洛陽郊外までやつてきます。

しかし、何進の宦官一掃計画は事前に発覚し、彼は宦官におびきだされて殺害されてしまいます。これを機に、袁紹らは宮中に突入し、宦官を皆殺しにします。

一方、董卓は、この大混乱に乗じて都洛陽を制圧すると、少帝を退位させ、異母弟の献帝（一八九—二二〇在位）を即位させて、おもうがままに残忍な恐怖政治を断行します。朝廷の重臣王允は、この状況に心を痛め、董卓の排除を画策します。

(本文抄)

王允は、「董卓はほしいままに権力をふるい、漢王朝の命運は今にも尽きようとしております。高祖皇帝（劉邦）が秦を討ち楚を滅ぼして、天下を統一されて以来、今日まで伝えられてきた漢王朝が、董卓の手で滅ぼされてしまうのです」と言った。しかし誰も董卓を倒す良い方法を思いつかなかった。

そのとき、突然顔をあげて笑った人がいた。驍騎校尉（近衛軍連隊長）の曹操である。曹操は、「近ごろ、私がつて董卓に仕えていましたのは、じつは、隙を見てやつを討ち取りたいと考えてのことです。今は董卓もかなり私を信頼しております。司徒（王允の役職）殿は宝剣の七星刀を持っておられるようですが、それを貸していただければ、やつを刺し殺します。私は死んでも怨みはありません」と。

王允はすぐに七星刀を取り出し、曹操に渡した。

次の日、曹操は宝刀を携えて、董卓のもとに向かった。

曹操が着くと、董卓が、「孟徳（曹操の字）、お前は今日はどうしてこんなに遅くなったんだ」とたずねると、曹操は、「馬がのろのろしていますので」と答えた。

董卓は呂布をふりかえって、「西涼から献上した馬があつたな。おまえ、一頭よりだ

して孟徳にやってくれ」といいつけると呂布が出ていった。

曹操は心の中で、「こいつの死ぬときだ」と思い、刀をぬいて突きさそうとしたが、いやいや董卓は力がつよい、軽々しく動いてはならぬ、とようすをみた。

董卓はでっぷりふとついで、長くすわっていられないので横になり、背中をこちらにむけた。曹操は「こいつめ、くたばってしまえ」と念じながら急いで刀をぬいた。

曹操が手を下そうとしたその瞬間、董卓はそばの鏡の中に曹操が背後で刀を抜くのを見た。慌てて「孟徳、何をしている」と叫んだ。

そのとき、呂布がすでに馬をひいて、ざしきの外まできていた。

曹操はすぐさま知略を使い、刀を捧げてひたす跪き、「それがし宝刀一ふりを手に入れましたので、献上いたします」といった。

董卓は刀を受け取って見ると、一尺強の長さで七宝がはめ込まれたみごとな刀であった。「すばらしい刀だ」と董卓。

その時、呂布が入って来たので、曹操は刀の鞘を解いて呂布に渡した。

そのあと、曹操は董卓に連れられて馬を見に出たが、その馬は全身真っ白で、大きな蹄ひづめでひっきりなしに地面を蹴っている素晴らしい馬であった。曹操はとつさに試乗したいと

言い、董卓が許すと、これを幸いとその馬に乗って逃げ去っていった。

曹操が走り去った後、呂布が董卓に「曹操の様子が変でした。刺そうとする気配がありました」と話すと、董卓は心の中に疑念が浮かび、はたと気がついた。

「そうか、あいつはこんな重用してやったのに、わしを暗殺しようとしていたのか」と。そして、すぐに似顔絵を描かせ、あちこちに送って曹操を捕まえるよう命じた。

(解説)

董卓は、性粗暴そぼうで残忍ざんにんな狼のような男といわれていました。陳寿ちんじゅは、「董卓は心拗ねけ残忍で、暴虐非道であった。記録に遺のこされている限り、恐らくこれほどの人間はいないであろう」と評しています。(『三国志』董卓伝)

『三国志』には、彼の残虐ぶりを示す話は数多くありますが、一例を示すと、宴会の席上で、数百人の降伏した者の舌や手足を切り、目をえぐり、あるいは大鍋で煮殺した。死にきれないものが転げまわっていても、董卓は平然と飲み食いしていた、とあります。

そして、朝廷の重臣であった王允は、国家のためになんとか董卓を除こうと考えました。

○曹操の登場

『三国志』の本文には曹操の風貌ふうぼうについての記述はありませんが、『三国志演義』では曹操を「身長七尺、目は細く髯ひげは長く」と描きます。身長一六一cmで、細い目に長いひげ。これも劉備と同じく、「人形劇三国志」に登場する曹操が、一番びったりしています。多分、これが私たちが抱く曹操のイメージだと思います。

曹操の父は曹嵩そうそうといい、中常侍曹騰そうとう（宦官）の養子です。ですから曹操は宦官の孫になります。

そして『三国志演義』は、曹操の少年時代のエピソードを次に続けます。少し長くなりますが引用すると、

臨機応変はかりごとの謀まかりごとが得意で、機知に富んでいた。叔父が一人おり、曹操の放蕩ほうとうぶりに腹を立てて、父の曹嵩に言いつけたことがある。曹嵩に叱られた曹操は、一計を案じた。叔父がやって来るのを見ると、偽いつわって卒倒そつとうし、身体がしびれたふりをしたのである。仰天ぎょうてんした叔父の知らせを受け、曹嵩が慌あわててようすを見に來ると、曹操はケロリとしている。「叔父さんの話では、麻痺まひの発作ほっさをおこしたそうだが、もうったのか」と、曹嵩が聞くと、

曹操は答えた。「もともと私はそんな病気にかかっておりません。叔父さんは私を嫌っておられるので、デタラメをいわれただけです」その言葉を信じた曹嵩は、以後、いくら叔父が曹操の過失を告げ口しても、まったく耳を貸さなかった。おかげで曹操は、気ままに放蕩を尽くすことができたのだった。

と、臨機応変にはかりごと 謀まができ、しかも機知きちに富んだ曹操を描きます。

そして次は、とても有名な話です。

汝南じよなん きよしやうの許劭きよは、有名な人物鑑定の名手だった。曹操は彼のもとを訪れて、「私はどう
いう人間でしょうか」とたずねた。許劭は答えない。なおもたずねると、許劭は言った。

「きみは治世ちせい のうしんの能臣のうしん、乱世らんせの奸雄かんゆうだ」

これを聞いて、曹操は大喜びした。

そして、黄巾軍との戦いがはじまると、騎都尉きとゑ（連隊長）を拜命して手柄をたてます。その曹操が王允の所蔵する「七星刀」を借り受けて、暴虐な董卓の暗殺を図りますが、あと一步のところで失敗し逃亡します。

一方、歴史書の『三国志』では、董卓が曹操に目につけ、驍騎校尉きやうきこうゑい（近衛軍の連隊長）に任命して自分の味方にしようとはしますが、曹操は董卓への協力を拒否して都を逃亡した

ことになっていきます。

(本文抄)

曹操は城外に脱出すると、自分の故郷に向かった。その途中、県で捕らえられてしまい、
県令(県の長官)の前に引き出された。

曹操が、「私は旅の商人で、姓を皇甫こうほと申す者です」と言うと、県令は曹操をじつとみ
つめ、「私は以前、洛陽でおまえを見かけたことがある。曹操だとわかっている。しばらく
牢にぶちこんでおけ」と言うと、関所の守備兵を帰らせた。

夜中になると、県令はこっそり曹操を牢から出させて尋問した。

「董卓はおまえを手厚く待遇したと聞くが、どうして自分から禍を引き起こすような真似
をしたのか」

「『燕雀えんじやくいずくんぞ鴻鵠こうこくの志しを知らんや(小人に英雄の志など分かるはずがない)』
だ。おまえはすでに私を捕らえたのだから、あれこれ尋問するまでもなかるう」と曹操。

県令は曹操に向かって言った。

「私をみくびるな。私は残念ながら、まだ主君とたのむ人に出会えないだけだ」

「私が身を屈して董卓に仕えてきたのは、ひたすら隙をみてやつを討ち、国のために禍を除こうとしたためだ。今、事破れたのも、まさしく天意というほかない」と曹操。

「孟徳（曹操の字）どのには、これからどこへ行くつもりだったのか」と県令。

「郷里にたちもどり、天下の諸侯を集めて軍勢をおこし、力を合わせて董卓を滅ぼすのが、私の念願だ」と曹操。

県令はこの言葉を聞くと、手ずから曹操の縛めをほどき、手をとって上座に座らせ、何度もお辞儀をしながら、「貴公はほんとうに天下の忠義の士です」と言った。

曹操もお辞儀を返して県令の姓名をたずねた。「私は、姓は陳、名は宮、字は公台と申す者。貴公の忠義に感動いたしました。官職を棄て、貴公のお供をして逃げたいと思ひます」と県令。

曹操は大いに喜んだ。そして二人して曹操の故郷へと向かった。

三日のあいだ旅をつづけ、成皋県のあたりまでやって来たとき、曹操は陳宮に言った。

「このあたりに呂伯奢という人がいて、私の父の義兄弟だ。そこへ行つて一晚泊めてもらおう。」

二人は屋敷までくると、中へ入って呂伯奢に挨拶した。

呂伯奢は、「朝廷からおふれが回り、おまえを逮捕しようとしているのに、どうしてここまで来ることができたのか」

曹操はこの間の事情を呂伯奢に説明すると、呂伯奢は陳宮ちんきゆうに頭を下げ、「あなたとめぐりあわねば、曹氏一族は滅んでいたことでしょう。今晚はお泊まりください。うちには良い酒がありませんので、西の村まで行って買って来て、ごちそうします」と言い、にまたがり出かけて行った。

曹操は陳宮とともにしばらく座っていたが、ふいに屋敷の裏で刀をとぐ音がした。曹操は「呂伯奢は私のほんとうの親類ではないし、さつきここから出て行ったのもあやしい。こつそりようすを探ってみよう」と。

二人して足音をしのばせ、居間の裏に回ると、「縛って殺したらどうだ」という声がする。曹操は、「やっぱりだ。今もし先に手を下さなければ、必ず捕まってしまうぞ」と言うや、陳宮とともに剣を抜いて飛び込み、男女を問わず皆殺しにし、つづけさまに一家八人を殺してしまった。台所まで行くと、なんと豚を一匹縛りあげ、いまにも殺さんばかりにしてあるではないか。陳宮は、「気を回して、悪気わるきのない人々をまちがって殺してしまつた」と言い、二人は慌てて馬に乗って出発した。

しばらく行くと、呂伯奢が驢馬ろばの鞍くらに酒がめをぶらさげ、手に果物や野菜をさげてやって来るではないか。二人を見ると、「どうして行つてしまわれるのか」と呂伯奢。

「お尋ね者の身ゆえ、長居はできません」と曹操。

「すでに豚を一匹さばかせ、おもてなしをするように命じてあるので、どうかすぐにおもどりください」と呂伯奢。

曹操は呂伯奢にかまわず先へ進んだが、数歩も行かないうちに、突然、劍を抜いて後戻りし、呂伯奢に呼びかけた。「そこへ来るのは誰だ」

呂伯奢がふりむいた瞬間、曹操は劍をふるつて呂伯奢を驢馬から斬り落とした。

仰天ぎょうてんした陳宮は言った。「さっきは間違つただけだが、これはどういうわけですか」

「呂伯奢が家に帰り大勢の者が殺されているのを見て、人を集めて追いかけて来れば、禍わざわいに遭あうだろう」と曹操。

「いけないと知りながら、わざと殺すのは道にはずれています」と陳宮。

「私が天下の人を裏切ろうとも、天下の人に私を裏切るような真似まねはさせぬ（我人われに背そむくとも人我ひとに背かせじ）」と曹操が答えたので、陳宮は黙り込んだ。

その夜は数里行ったところで旅館の門を叩いて開けさせ、宿泊した。

陳宮は、「曹操をりっぱな人物だと見込んでついて来たのに、こんなな奴だったとは。いま生かしておけば、必ずのちのちの禍となるにちがいない」と思案し、劍を抜いて曹操を殺そうとした。陳宮は手を下して曹操を殺そうとしたとき、ふいに気が変わった。「国のために、彼についてここまで来たのだから、殺すのは道にはずれる。」

劍を鞘さやにおさめると馬に乗り、夜が明けるのを待たずに、ひとり立ち去った。

曹操は目がさめると陳宮がいないので、「あいつは、私がいった言葉を聞いて、情け知らずではないかと疑い、私を見捨てて行ってしまったのだ。先を急がねばならない。ぐずぐずしてはられない」と、夜を日について陳留ちんりゅうに到着した。

(解説)

洛陽を脱出して故郷の豫州よしゅうの譙県しやうけんに向かった曹操は、途中、県の関所で捕まっています。しかし曹操の大专及以上学历に共感した県の長官の陳宮は、曹操を釈放して行動をとめます。

ここを、歴史書の『資治通鑑』では、次のように記述しています。

「曹操は姓名を変更し、裏の抜け道を通つて、東に帰ろうとし、中牟県を過ぎたところで、亭長に疑われ捕らえられて県庁に連行された。その当時、県庁はすでに董卓の書簡を受けていた。ただ功曹こうそう(州郡県の首席補佐官)のみが内心、彼が曹操であると判わかつたが、世はまさに大混乱に陥るときに、天下の英雄を拘束すべきではないと考え、県令に上申して釈放させた。」

『三国志演義』では、中牟ちゅうぼうけん県の県令を陳宮にして、彼が曹操を助けて行動をともしたことにしています。

我人に背くとも人我に背かせじ — 呂伯奢一家惨殺事件

そしてその後に、曹操が、呂伯奢一家を殺したとされる事件が描かれます。

ただし、『三国志』の本文には、曹操が呂伯奢一家を惨殺さんさつする記述はありません。

「曹操は董卓に従うことを良しとせず、そこで姓名を変え、洛陽を脱出し間道かんどうを通つて東へ帰つた。関所こうかん(虎牢関)を出て中牟を通過するとき、県の亭長に疑惑を抱かれ、県まで連行された。まちの中に人知れず彼を見分けた者がおり、頼み込んで釈放してやった。その後、曹操は陳留郡に行きつくと、家財を処分して義兵を集め、己吾きご県けんにおいて旗あげし

た。」（陳寿『魏書』武帝紀、今鷹真・井波律子訳。ちくま学芸文庫「正史・三国志」より）

このように、『三国志』本文には、曹操が呂伯奢一家を殺す記述はありません。では、どこにあるかという点、百年ほど後の南朝の宋の時代の裴松之がつけた『三国志』の注にでてきます。

裴松之は、陳寿の『三国志』に、本文とは違う異説を注釈としてつけました。

『三国志演義』では、『三国志』の裴松之の三つの注をつなぎあわせて曹操が呂伯奢一家を殺したことにし、曹操の冷血ぶりを徹底的に描きます。

この箇所の裴松之の注とは、王沈おうしんの「魏書」、郭頒かくはんの「世語」、孫盛そんせいの「雜記」の三つです。

王沈『魏書』——魏の末期に成立。司馬氏しばしにおもねっているため史料価値は劣ると言われる。

「曹操は、董卓の計画は必ず失敗に終わると判断したので、董卓の任命に応じず、数騎の供を連れ郷里に逃亡した。途中、旧知の間柄にある成皋県の呂伯奢しよつきやくの家に立ち寄ったところ、呂伯奢は留守で、その子らは食客とぐるになって曹操を脅し、馬と荷物を奪おうと

した。そこで曹操は、自ら刀を手にして数人を打ち殺した。」（曹操の一行と呂伯奢の子たちの争い — 正当防衛）

郭頌『世語』 — 内容に多少問題はあるが、変わった記事があり、よく世間で読まれたとされる。

「曹操が呂伯奢の家に立ち寄った。呂伯奢は外出していたが、呂伯奢の五人の子は家について、曹操を礼儀を持ってもてなした。しかし、曹操は自分が董卓の命令に背そむいていたため、彼らが自分を始末するつもりではないかと疑いを抱き、夜の間には八人を殺害して立ち去った。（曹操が疑心暗鬼きしんあんきで殺す）」

孫盛『雜記』 — 話を盛り上げるためによく勝手にセリフを創作すると言われる。

曹操は、（呂伯奢の子らが）用意する食器の音を耳にして、自分を始末するつもりだと思ひ込み、夜の間には彼らを殺害した。その後、悲惨な思いにとらわれ「わしが人を裏切ることがあろうとも、他人にわしを裏切らせはしないぞ」と言った。（曹操が誤解して殺す）

王沈の『魏書』は、陳寿の『三国志』よりも早く編纂され、『世語』はほぼ同時代、『雜

記』は六十年ほど後にできます。

陳寿は『三国志』を著すにあたり、曹操が成皋県せいこうけんで呂伯奢一家を殺したという王沈の『魏書』の説を採らず、曹操が一人で洛陽を脱出して中牟県で捕まり、その後、陳留郡に行ったという説を採用しました。

しかし、『三国志演義』は、ご丁寧にも『世語』と『雜記』の二つの話をつなぎあわせて上に、それに付け加えて呂伯奢も殺したことにしてしまいます。そうして、曹操の悪辣あくらつ・冷血ぶりを強調します。曹操にとっては、名誉棄損めいよきだんもの話です。

しかし、ここで『三国志演義』は二つの話をつないだために、曹操の逃亡経路にどうみても不自然なところがでてきます。『三国志演義』では曹操の逃亡経路は、洛陽を脱出↓中牟県↓成皋県↓陳留郡へ、となります。

ここで成皋県と中牟県の位置関係をみると、成皋県のほうが洛陽に近く、一方の中牟県は洛陽からかなり離れて陳留郡に近いところにあります。

したがって、曹操は洛陽を脱出すると、はるか遠くの中牟県まで逃げてから、また再び洛陽に近い成皋県まで戻ってくるという、かなり無理な設定になってしまいました。

そこから、『三国志演義』の作者は、北方の地理にうとい人だったのではないかとされ

ていますが、はたしてそうでしょうか。

それは、『三国志演義』のこの場面の目的が、曹操の悪辣・冷血ぶりを浮かびあがせることにあったので、位置関係の不自然さには頓着しなかつたのだと思います。物語としての面白さを優先した、と考えるのが妥当ではないでしょうか。

曹操は自分を見限った陳宮と別れ、陳留郡まで行くと、ここで反董卓の旗上げをします。それは、次回で。